

開基150年記念特集

東蝦夷地南部藩モロラン陣屋

北辺警備のラスト・サムライ

幕末の動乱の歴史が室蘭にある。

南部陣屋。幕命を受けた南部藩が、外敵から蝦夷地を守るため、交通の要「モロラン」に陣屋を築き今年で150年を迎える。

幾多の苦難に耐え、誇りを守った南部藩。サムライたちの魂は、南部陣屋の史跡に息づいている。

藩士たちが植えた杉は、静かに史跡を見守る



敵の侵攻から噴火湾を防衛

18世紀末、鎖国日本の徳川幕府にとって、蝦夷はまだ「ニッポン」ではなく「マツマエ」であり、領土として強く意識されていなかった。はつきりとした国境線を目指して、帝

政ロシアが千島、樺太へ次々と南下侵攻。幕府にも蝦夷植民地化の危機感が広がった。ペリーの黒船艦隊来航により箱館開港と箱館奉行所を設け、蝦夷の直轄を決めたのが安政2年(1855年)。もはや松前藩任せでは無理との判断もあった。

こうして老中より南部(盛岡)藩へ幕命が下った。東北諸藩で分担し、南部藩は箱館から幌別間(約248キロメートル)の噴火湾(内浦湾)沿岸の防衛ライン構築に乗り出す。現地調査にあたった上山半右衛門、新渡戸十次郎(新渡戸稲造の父)は、仮に敵国とするロシアは港から侵攻すると想定した兵法により陣を敷いた。津軽海峡を守る箱館元陣屋(函館)に主力を置き

エトモ(室蘭)と向き合う砂原、西蝦夷地の寿都への重要な拠点オシヤマンベに砲台を備えた。噴火湾侵入船は領土侵犯と

して三方からの挟み撃ちで打ち払う。モロランの噴火湾と白鳥湾を共に見張れるペケレオタ(陣屋町)は、対岸のエトモ岬とポロシレト岬(崎守町)からの砲撃地点と結ぶ出張陣屋として、絶好の軍事拠点。モロランは蝦夷地東西交通の要でもあった。

中で条件の厳しい警備に350人の兵が

南部藩がモロラン派遣を命じたのは、城下の職人衆たち。大工、土方、左官、屋根ふきなど、100人余りを指揮して村田宗吉らが安政3年3月から9月までの間に、突貫工事で城郭

並みの陣地を構築。相当な難工事だった。

実現したのは珍しい内外二重方形土塁の陣屋。外郭を巡らし、その囲みの内側に本郭を土塁で囲み、二重構造で築かれている。兵舎など7棟を配置し、総面積は約1万7千500平方メートル。本郭の土塁上には黒塗りの防護柵を巡らし、海を望む表門の左右は水堀。ポロシレト台場(砲台場)詰めも含め総勢350人余りの南部藩兵が、約13年にわたり、幕府からの援助も少なく、藩からの衣食給与もままならない悪条件の中、不自由と辛さに耐えて駐留する。この異郷の地に果てた者も多い。布陣の主力は大砲(カノン砲、白砲)。鉄砲武者らが海をにらんで備え、水際の撃退を想定して

いた。

守り抜いたサムライの誇り

慶応3年(1867年)、徳川慶喜の大政奉還で幕府が滅び、新政府によって箱館裁判所(のち箱館府・総督清水谷公考)が「五稜郭」に設置され、蝦夷地警備は幕府の箱館奉行から引き継がれた。

翌慶応4年(明治元年)、戊辰戦争の拡大で奥羽越列藩同盟が団結して新政府軍(官軍)と抗戦。南部藩も同盟参加を決めたことから、まず箱館元陣屋の南部藩兵が撤退。これに応じて8月12日、モロラン出張陣屋でも鈴木十蔵ら藩兵約100人が陣屋に火を放った。新政府への明け渡しを拒み、官軍に陣屋を再利用させないため。サムライの誇りを守ったのである。焼け落ちる陣屋という「城」を見納めて、すべての役目を終えた南部藩兵たちは、ようやく懐かしい故郷へ帰還した。

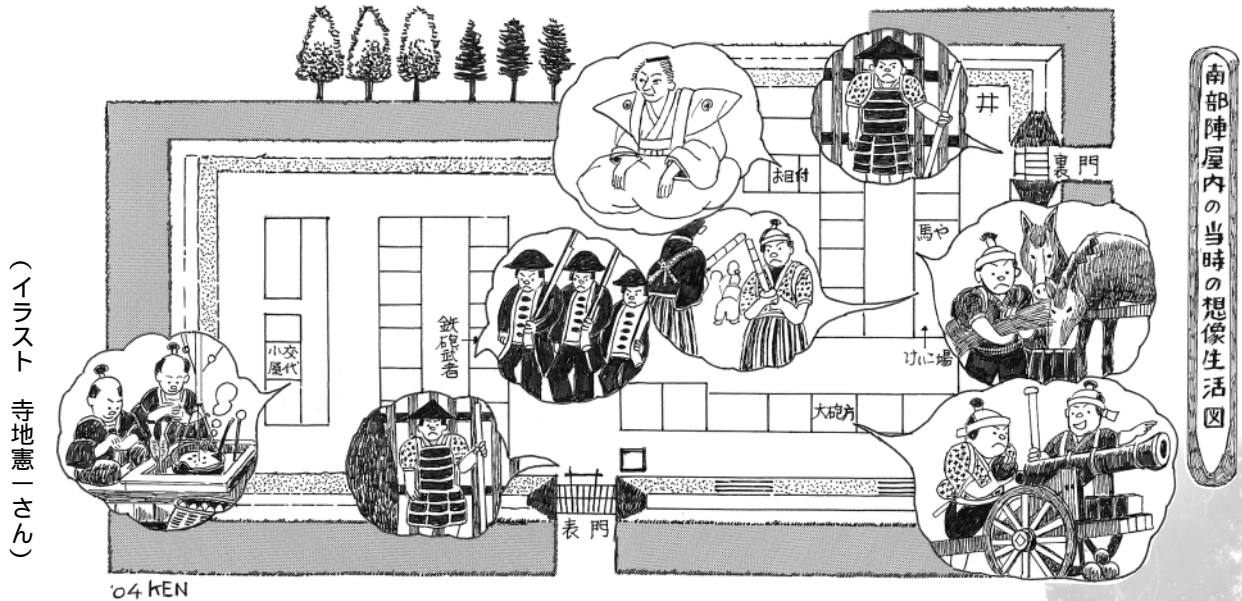
箱館戦争の直前 室蘭に土方歳三が

箱館戦争前夜の慶応4年、10月20日から21日の間に、榎本武揚率いる徳川艦隊の「長鯨」「神速」を避けてエトモ湾に入港。これは、沢太郎左衛門回想録「一年の夢話」で明らかにしている。



昭和43年から48年に平面復元された南部陣屋の史跡

砲台場詰めを含め、約350人が生活。海からの敵の攻撃に備え、大砲や鉄砲武者らを配置。うまやも備えられ、いつでも戦闘態勢がとれた。戦いのけい古に励みながらの日々は厳しく、楽しみは少なかった。



新撰組の副長として幕末を駆け抜けた土方歳三は、室蘭で何を思ったか（写真：市立函館図書館蔵）



史的な意義を再認識する 150

土方と新撰組は20日午後11時に「大江」で、室蘭上陸後に鷲の木に上陸した。これは当時の箱館奉行支配組頭、杉浦清介が書き残した「苟生日記」（活字版・市立函館図書館蔵「維新日誌」）という文献から推理できる。

その後、土方らは鷲の木から一路「五稜郭」へ進撃。蝦夷地を占領する。箱館戦争の激しい展開の中、モロランに榎本政権下の開拓

隊士約100人とともにトキカラモイ（海岸町）で白鳥湾の景観をながめ、モロラン（崎守町）の会所などで食料を補給。鷲の木（渡島管内・森町）上陸直前のつかの間

150年の歴史に残る魂 地名発祥の地「崎守」は「防人」の意味で、北方警備の先駆けとなった東北武士団の栄光を永遠に伝えるシンボルとなっている。南部藩モロラン陣屋は「朝日

ずである。土方は戦いに生き残った隊士約100人とともにトキカラモイ（海岸町）で白鳥湾の景観をながめ、モロラン（崎守町）の会所などで食料を補給。鷲の木（渡島管内・森町）上陸直前のつかの間

奉行が設置され、沢太郎左衛門ら約250人が駐留し、基地化する。南部藩陣屋も再び整備され、官軍との戦いに備えられたが、やがて「五稜郭」総攻撃の激戦で土方は戦死。榎本軍は降伏し、最後にモロランの部隊も降伏して箱館戦争は終結。南部藩モロラン陣屋は再び沈黙の廃きよとなった。

南部陣屋史跡150年祭 慰霊祭
 南部藩士の慰霊祭を、南部陣屋史跡に隣接する墓地で行います。
 （当日参加自由）
 日時 8月1日（日） 9時～
 《詳細》生涯学習課 ☎22 5 0 9 4

絵地図やパネル、資料を展示 南部陣屋史跡開基150年記念特別展
 日時 7月17日（土）～ 8月15日（日） 9時～17時
 会場 民俗資料館
 入館料 大人300円、中学生以下と70歳以上は無料（8月1日は無料開放）
 《詳細》民俗資料館 ☎59 4 9 2 2

年記念祭が、8月1日開催される。はるかな時を超えて今、イラスト・サムライの魂がよみがえる。
 参考文献・石井勉著「徳川艦隊北走記」（学芸書林・昭和52年刊）
 文・室蘭地方史研究会会員 久末進一さん